

【人文学】

研究論文

映画メディアの教育効果

— 「はなちゃんのみそ汁」による観客の意識変容 —

上 菌 恒 太 郎^{*1}

Educational Potential of the Movie Medium

Audience consciousness changes caused by the movie "Miso Soup by Hana"

Kohtaro Kamizono

Summary

The movie is a passive medium compared to classroom work in school, where students are asking, talking and reflecting cooperatively. But when a teacher only stands in front of students and uses a blackboard to convey information, the situation is the same as seeing a movie. Movies could be a very effective example of a teacher-centered lesson, where audiences are passive. In this paper, the movie "Miso Soup by Hana", which is based on a daily life drama, was chosen to see the effects on audiences. Association method was employed to make an assessment of movie audiences collectively. The consciousness of the audience changed in terms of <peace>, <miso soup> and even <me>, where self-affirmative consciousness increased significantly ($p < .01$). The findings suggest that cooperative classwork could create more effective support for self-affirmative consciousness when a good teaching material is produced.

Keywords : (collective assessment of a movie, self-affirmative consciousness, association method, story)

キーワード : 映画の集合的評価、自己肯定感、連想法、物語

目次

- 1 はじめに
 - 1.1 聞く、見る、考える場
 - 1.2 観客の意識変容を評価する方法
2. 映画「はなちゃんのみそ汁」
 - 2.1 いのちと食を語り合う映画会推進委員会
 - 2.3 映画「はなちゃんのみそ汁」試写会の観客構成
3. 提示語〈平和〉に見る意識の方向
- 4 〈みそ汁〉はどのように意識されているか
 - 3.1. 長崎の大学生の〈みそ汁〉
 - 3.2. 映画の観客の〈みそ汁〉意識の変化

^{*1} 教職課程教授

2016年10月24日受付

2017年1月18日受理

5 「はなちゃんのみそ汁」は〈自分〉意識を揺り動かした

6 「はなちゃんのみそ汁」の限界

7 おわりに

註

1. はじめに

1.1 聞く、見る、考える場

情報を伝えるメディアが意識に影響を及ぼすとき、それは教育である。教科書メディアが機能するために教室という場と教員があり、映画メディアが機能するために映画館という場がある。映画の場において観客は、個別的であり、教室の場は協同の学びが組織されるならば、集会的である。それぞれの場において受け手がどのような体の姿勢にあるかの区別が両者の違いをはっきりさせるから、映画ならびに協同の学びによる教室の場の情報の受け手の体の姿勢から本論を始めたい。教員が子どもの前に立ち黒板や機器を使って情報を送る教員中心の授業では、子どもは見て、聞く受け身だから、映画と同じである。

存在するだけで人の意識に影響を及ぼす事態を除けば、すなわち意図的な働きかけに限定すれば、語ることそして聞くことは特別な装置によって構成された場を必要としない。誰かの語りに集中するとき、受け手は、多くの場合に耳を傾けて体を一定の形に縛っている、多くは坐って動かない。音声だと、言葉の意味のほかに、耳から入る言葉や抑揚によって、言葉の意味と付随するメタ情報を、すなわち軽く言っているのか重々しい事態なのかをとらえながら、物語に入り込む。音声という風の音を意味ある言葉としてメタ情報とともに統合し、事態を理解する作業は、集中を要し、それは体の集中した姿勢として表現される。体の動きのなさは裏腹に、意識は、物語の事態を再構成しながら、自分のなかで動いている。物語の語り聞かせは、演技する語りつまり見る要素を増やした語りよりも、聞き手の意識を物語へと活性化させる。見る要素が増えると、聴衆は語り手という物語と自分以外の対象へと、つまり自分の外側へと意識を向けざるを

得ない。音楽は目をつむって聴けるが、テレビは語り手という対象へと目を引きつける。

自分がぼんやりできるのは、むしろ外側に映像が流れる場合であろう。メディアが送る情報量を増やすほどに、受け手は情報の受容に意識をとられ、送られる情報に感覚をとられ、目の前という外側に身を任せることになる。情報の送り手という外側に感覚を任せることは、自分が受け手となってぼんやりとする意識になる。景色が移ろって楽しませて、意識と体は動かない、坐ったまま窓の景色を眺めている姿勢である。その場合、関心が情報を統合し、取捨選択し、批判して、自分の意識として働く。内声として自分のなかで響く物語が、語り聞かせとして理想であろう。

映画というメディアを目の前にすると、受け手は、坐ったまま視覚と聴覚を預ける姿勢になる。次に何をするか、受け手は選択できない。時間の流れを、受け手が制御できない。それは、相手に耳を傾ける場合も同様である。坐って聞き、見る姿勢に縛られるとき、対象に支配された時間の流れに身をおくほかない。席を立ち時間を切り裂く行為は、不作法になる。

次に何の情報が得られるかに介入しないあなた任せは、快樂といらだちの間に受け手をおく。受け手の意見によって、筋立て、番組編成、あるいはカリキュラムは変わらない。工夫して努力するのは、情報の送り手であり、情報の送り手が受け手を楽しませるほどに、受け手は何もする必要がなく、魂を送り手にとられる。

教員が前に立ち、機器を使って送る情報量を増やし、受け手の感覚を満たすほどに、受け手は受け身に陥る。受け手を釘付けにする送り手の情報によって、受け手が坐った姿勢を維持するほどに、優れた教員、優れた映画、優れたテレビ放送になるのだろう。だから送り手は受け手を自分に引きつけることに奔走し、テレビは視聴率の

獲得が、いい授業になる。視聴率をとる授業は、受け手の感覚に合わせて満足を売る。受け手は自分の感覚で満足か不満足かを判断し、体全体で受け止める感覚刺激の快に、自分の感覚や思考のあり方を組み替えらさせる受苦の場よりも、笑顔で満足を表明するだろう。「いいね」ボタンは軽い満足の表明であり、考え方を再構成する成長への苦しみには押されないだろう。軽い 100 個が、重い 1 個より、支持率が高く、視聴率が高く、儲けにつながるのだろう。

視線を自分に引きつける教員中心の授業においては、情報の送り手が努力している。しかし、スポーツの練習は、コーチがやるわけではない。選手がやる、だから選手がきつい。受け手が伸びる授業は、受け手が意識を動かし、考えが動き、体も動く、受け手がきつい場であろう。努力が自分を伸ばすならば、坐って感覚を楽しませる授業は、受け手の思考の筋肉をつけない。スポーツ番組を見て楽しんでも、スポーツをする筋肉がつくわけではない。子どもに必要なのは、何かができる筋肉をつけることだ。受け手の成長を目指す、受け手が努力する場が必要になる。教員はコーチまたは産婆の位置になる。教員が視線を集めてスポットライトを浴びる教室は、子どもの成長のための場とは異なる。受け手が動くとは、受け手の考え方が動き、認識の枠組みが動き、そのために体も、見通したり、調べたり、聞いたり、書いたり、話したり、まとめたり、ふり返ったり、動くだろう。受け手に関心が喚起され、言い換えると学ぶ意欲、自分を構成する枠組み脱皮への希求があるとき、受け手が動く場が成立する。成長への意欲が努力する場を支える。自分は変わることができるとの自己肯定感に支えられた受け手の努力ならば、なおいい。

教科書を含む書籍メディアは、それ自体、冷たく動かない。読み手の側から動いて手にして開く必要があり、文字を追う必要がある。書籍メディアは受け手が動くことを要求する。受け手の動きを待つ静かさによって、受け手が時間を管理できる。受け手の動きを待つ教科書を含む書籍メディアの静かさを、教員が保つことは許されないのだろうか。

書籍は、教員が介在しない場合、読み手が時間管理する。読む速さの違いが許される。読む速さは、個人によ

るし、どう読むかによる、情報を拾うのか、行間で考えを練るのか。教室で開く書籍は、教員が進度を管理し、一定時間で終了する。時間を補うのが、他の授業時間の転用であり、宿題という名の家庭の時間の転用である。家庭と学校とが対等ならば、学校の宿題が家庭に持ち込まれるように、家庭の宿題を学校でこなすこともあろう。いや、時間管理は学校と家庭がおこなうものであり、子どもには許されないのか。学校や家庭とは独立に、受け手がおこなう時間管理は許されないのか。受け手を待つ静かな忍耐を、学校も家庭も保っていい。

映画の場合、弁士といえども上映進行を早めたり遅らせたりしない以上、観客にとって自動的に始まり、終わる。映画の場合上映時間は、興行者を制作者側に含めると、制作者という送り手の意図に属する。受け手と制作者とは画面と客席の間で截然と切れており、観客は受け身である。すなわち、坐って見る姿勢に、身体は収斂させられる。じっと坐っている以外の動き、途中で挙手する必要も、意見を言う必要もないし、わかったかどうか確認される場面もない。映画を理解したかどうかの、いわゆる試験もない。

受け身である分、観客は王様である。関心がない、または面白くなければ、見ない。どれほど芸術性や内容を訴えようと、受け手に支持されなければ商業ベースの映画館では上映されない。新しいポテトチップス商品と同様、受け手は王様であり、黙って坐って楽しくさせてくれなければ受け入れない姿勢によって、作品の命運を決める。抵抗するならば、自主上映であろう。

学校の教科書は、楽しさを工夫するけれども、黙って坐っていけばいいわけではなく、理解を要求され、ふり返ってテストされ、果ては理解しない責任は受け手にあると宣告されかねない攻撃的なメディアである。教員は、教科書内容の受け手でもあり、評価する側に立つ攻撃者でもある。多くの場合、教員は教える側に立ち、教科内容がわかっているふりをする。教科書側に立つ方が、立場が強いし、安全である。しかし教員は、受け手の側に立ち、教科書の知を切り刻んで吟味することもできる。教員は、理解を助けるケアリングをおこなう者であるならば、教科書の知を子どもに向けて組み直す者である。教員は、理解を助ける（ケアリング）とともに、理解を要求して迫りくる攻撃者（ティーチャー）という二重性

を持つ。教員がケアリングを旨とするならば、教室を、好きにマイペースでやらせてくれる場にしていし、どの映画を見るかのカリキュラムを子どもに合わせて組み替えていい。カリキュラム・マネジメントの力がある教員は、子どもの意識の動きに沿ってカリキュラムを決めるはずである。しかし、学校のカリキュラムは日本の場合、国家によって決められる。教科書と時間進行を決められたように運用しながら子どもに理解をもたらすために、教員が存在する。

映画の場に教員が介在すると、監督はどんなにうれしだろう、映画が理解されるように観客が導かれるのだから、無理解な観客が減るはずだ。とは言え、教員つき映画なぞだれも見に行かないだろう、余計なお世話だ。

教員を弁護できるとすれば、余計なお世話かどうかは、観客が成長を望むかであろう。大人は自分の認識枠をくつがえす成長を映画に求めているだろう。映画の受け手は、ばらばらな意識のままに坐っており、互いに協同して切磋琢磨することはない。映画において、予め見通しが与えられることはなく、感覚の楽しみの中に過ぎることが望ましく、途中で話し合うグループワークもなく、ふり返って認識を深める場も組織されない。映画は、素材の提示で終了する。素材の提示で、どれほどの意識変容をもたらすかに、それもできれば楽しい方への受け手の変容に向けて、映画は努力する。教員の努力は、素材の提示の後の余計なお世話である。理解と成長は、楽しみだけで終わらない。

「はなちゃんのみそ汁」は、自分の枠組みに止まる感動映画だと思う。結婚も死別もガンというドラマも、家族の枠組みのなかで起こる、日常だ。だから、まだ伸びることへの欲求を抱く、知らない世界を見たい大学生には、世界を広げる刺激が薄く、学園祭の自主上映に取り上げられそうにない。この映画を求めるのは、認識世界を広げる刺激をもはや必要と感ぜない層だろう。後から述べるこの映画の観客構成は、女性に参加する人が多い、ロコミのネットワークがあるといった社会的要因以上に、日常生活の織りなす人生枠に収まるドラマに合っているようだ。受け手は、送り手を適切に選んでいるのだろう。

日常の枠とは異なり、学校へは、成長の期待を背負って、情報の受け手が通う。期待は国家や家庭のものだとしても、大きくなりたいたいの欲求が子どもの体にある。

教員は成長の媒介者として教室にいるはずで、受け手は自分が成長するために、教室にいる。授業は素材の提示で終わらず、見通し、協同での学び、ふり返りという参加過程が工夫される。教科書は、教員にとって、授業を取り仕切るための素材である。教員が自分をどう自覚するかによって、子どもにとっての授業の意味は変わる。

教員のいるいないによって、成長のあるなしによって、映画と授業とは一見区別できそうだ。しかし、感動は成長だろう。自分の成長、あるいは認識の深まりを感じる感動は楽しい。映画は、視野の広がり、考えの変容を期待できる。「はなちゃんのみそ汁」は楽しく深い、を狙っている。

授業となると、逆に、感動するものは多くない。成長は、一度の感動で起こらないとも言える。感動を求める教員は、刺激の強い素材あるいは映画を求めると同じ意識構造にありそうだ。

事実であるか、フィクションであるかは、教科書と映画とを分けない。事実という提示の仕方も、意図によって切り取られた一つのフィクションである。切り取られたという意味では、教科書の実事も提示素材であり、受け手が事実であることを確認するためのメタ情報と手段を得なければ、フィクションと変わらない。構成されたという意味で、映画も教科書も、意図を媒介とした構成物である。事実であるかは、素材の提示に留まる限り、受け手にとって向こう側の世界に属する。

映画「はなちゃんのみそ汁」の場合、事実とフィクションの違いは、教科書に採録された物語と同じレベルだと考えていい。事実に基づく物語があり、これにもとづいて作られており、異世界フィクションへの飛躍は少なく、日常から飛躍しない構成になっている。むしろ、教科書の方が、日常から飛躍した世界を描いている。「はなちゃんのみそ汁」が九州北部の日常によって物語を描く以上、長崎の観客への距離は近い。

1.2 観客の意識変容をとらえる方法

映画の受け手すなわち観客は、例えば『映画理論講義』が「論じられるのは主として、個人的で、心理的で、美的な、一言でいえば主体的体験としての、映画に対する観客」¹ であるというように、ばらばらの個人として扱われてきた。実際、個人としての観客や評論家の見た

映画の感想や意見は出回るが、観客が全体として集合的に、どのように意識が動いたかを評価した映画の観客論は見受けない²。それは集合的な意識分析の方法がなかったからであるし、意見表明を個人に求める思考が欧米にあるからだろう。「ようやく映画理論を学ぶための基本図書と呼べるものを手に」したと評される『映画理論講義』にしても、ライプチヒの W.ヴント以来の実験心理学やフロイトの深層心理を個人のものとして取り上げるが、観客の側の意識における映画評価を取り上げるに至っていない。観客の意識に映った映画となると、未開拓の状態なのだろう。

この課題、観客の意識に映画がどのような印象を呼び起こしたかを明らかにするために、本論は連想法³を用いる。すなわち、単一提示語による自由連想によって、提示語から思いつく言葉を 50 秒で書いてもらう方法で、観客の意識を全体として集め、連想処理プログラムを用意して連想マップを作成し、映画前後の意識変容を見た。そして受け手による想起の前後変化を、映画の影響と見なす。連想法は、受け手の意識を集合的に集め、量的かつ質的に、受け手の意識が映画なり授業なりによってどのように変化したかをとらえる手法である。連想法によって、受け手が送られたメディア情報をどのように受け止めたかを全体として捉える。

本論では、映画前後に行った連想調査のうち提示語〈平和〉〈みそ汁〉〈自分〉〈生きる〉の結果によって、「はなちゃんのみそ汁」を論じる。

映画が意図的な提示であるならば、観客の意識にどのように影響したかによって、その提示如何を論じることが妥当であろう。個人がどう映画を論じるかには別のおもしろさがあるとしても、連想法は受け手全体の意識に映った映画論を明らかにする。メディアが意図的に何かを伝えるとき、受け手の意識に、意図したものであれ、意図しないものであれ、どんな変容が呼び起こされたか明らかにするべきであろう。連想法は、受け手全体の意識に映った映画論を切り開く。

2 映画「はなちゃんのみそ汁」

2.1 いのちと食を語り合う映画会推進委員会

長崎の「いのちと食を語り合う映画会推進委員会」は、脇山順子と上菌恒太郎を代表委員として、「ぶたがいた

教室」「天のしずく」に続いて第 3 作目に「はなちゃんのみそ汁」を取り上げた。映画「はなちゃんのみそ汁」は、乳がんにより 33 歳で急逝した長崎県出身の安武千恵さんが、みそ汁づくりを通して幼い娘に“生きること”を伝えた実話をもとに構成している。病と闘いながら、前向きに生き抜いた千恵さんと家族の姿を、阿久根知昭監督がコメディタッチを織り交ぜて描き、西日本新聞の努力もあって、話題になっていた。この映画の試写会を 2016 年 4 月 26 日諫早で、4 月 30 日に長崎でおこなったが、試写会の集まりも多かった。

この映画のために上菌恒太郎は、以下の推薦文を書いた。

たかがみそ汁、されどみそ汁。はなちゃんのみそ汁は、いのちのみそ汁である。出汁をとった味噌汁を子どもに作らせることは、生きることを伝えたい大人の思いの凝集である。この映画の、いのちを育むひたむきな思いは、わたしたちを感動させ、食べることを生きることを深く考えさせる。

笑いながら見始める人生劇は、ドラマチックに展開しながら、やがて、食べて生きているわたしたちのいのちのありようを心に刻ませる。生きることは食べること、この自明を大切にしようと思わせる、実話に基づく映画の力がある。

この映画を見て、自分と家族と世界の子どもに、何ができるか考えてみたい。生きることへの自己肯定感、案外、みそ汁の出汁にあるのかもしれない。

「いのちと食を語り合う映画会推進委員会」は、命を支える食の大切さを取り上げるべく、普及メッセージを「いつものみそ汁、生きる力」と決めて、通称「はなちゃん会議」を開き、大島 SOY-ne (ソイーネ) が作る味噌玉をプレゼントしながら上映をおこなった。

本論は、映画「はなちゃんのみそ汁」による観客の意識変容を知るために上記試写会でおこなった連想調査をもとに、観客の意識の動きを明らかにする。映画が観客の意識にどんな影響があったかは、「はなちゃん会議」メンバーが活動の意味を確認するとともに、評論家や個人が映画を評価してきたこれまでのスタイルからすると、受け手全体の意識の動きによって評価しながら、すなわち自己確認しながら上映会を進める試みとして新しい。

みんなが集まって映画を見る行為には、場を共にする

意味がある。それは個人別々のメディア鑑賞や、「いいね」マークの数を競う評価とは異なる共感の雰囲気、笑いを共にし、涙すまいと努力しながらも察し合い共感する場、他者を感じる場のよさがある。そういった場の構築が自主上映によってみんなで盛り上がった結果ならば、なおさらである。共にいる上映の場でみんなの意識がどのように動いたか、連想法は、共にある場の意識を集合的に解明するツールである。

2.2 映画「はなちゃんのみそ汁」試写会の観客構成

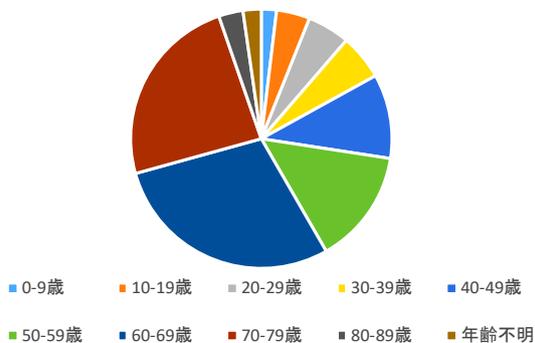
観客は、60歳から79歳が半数を超え、女性が86%を占めた。したがって諫早・長崎で266名分を回収した連想調査表の分析結果は、60歳から79歳の年齢層の女性を中心とした意識である。

「いのちと食を語り合う映画会推進委員会」は映画の試写会を諫早・長崎でそれぞれ昼と夜の2回ずつおこない、参加者総計285名であったから、連想調査表の回収率は93.4%だった。地域別では、長崎が67.7%を占める。映画「はなちゃんのみそ汁」観客構成を表1に示す。

表1 映画の観客構成

諫早・長崎試写会の回答者構成 総数:266人(長崎67.7%、諫早32.3%)		男:13.9%		女:86.1%							
	0-9歳	10-19歳	20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-69歳	70-79歳	80-89歳	年齢不明	計
人数(人)	5	11	14	15	28	38	77	64	8	6	266
百分率(%)	1.9%	4.1%	5.3%	5.6%	10.5%	14.3%	28.9%	24.1%	3.0%	2.3%	100.0%

人数(人)



3 提示語〈平和〉に見る意識の方向

直接映画のテーマに関わらない提示語に観客の意識の流れが反映することがある。〈平和〉は、映画の主題ではないが、そして平和意識がこの映画によって大きく揺り動かされることはなかったが、観客にとってこの映画が何であったかを動いた意識の方向によって示している。以下は、連想法によるすべての回答語を表示した連想マ

ップであり、多い回答語ほど中心方向に位置するようにプログラムしてある。中心からの距離が提示語との連想上の近さ（連想距離）である。この連想マップにおいて上下左右の方向には意味がない。

図 1 によって映画の前の観客の平和意識を見ると、「戦争」が連想マップの最も中心寄りに位置し、回答者

連想マップ(Association Map) Date:2016.5.9 Module Version 5.01
2016年4月「はなちゃんのみそ汁」(諫早長崎統合)映画の前 Cue Word: 平和

回答者数:266名, 回答語種数:519種類, 回答語総数:1703語, エントロピ:7.57, 連想量総和:31.34

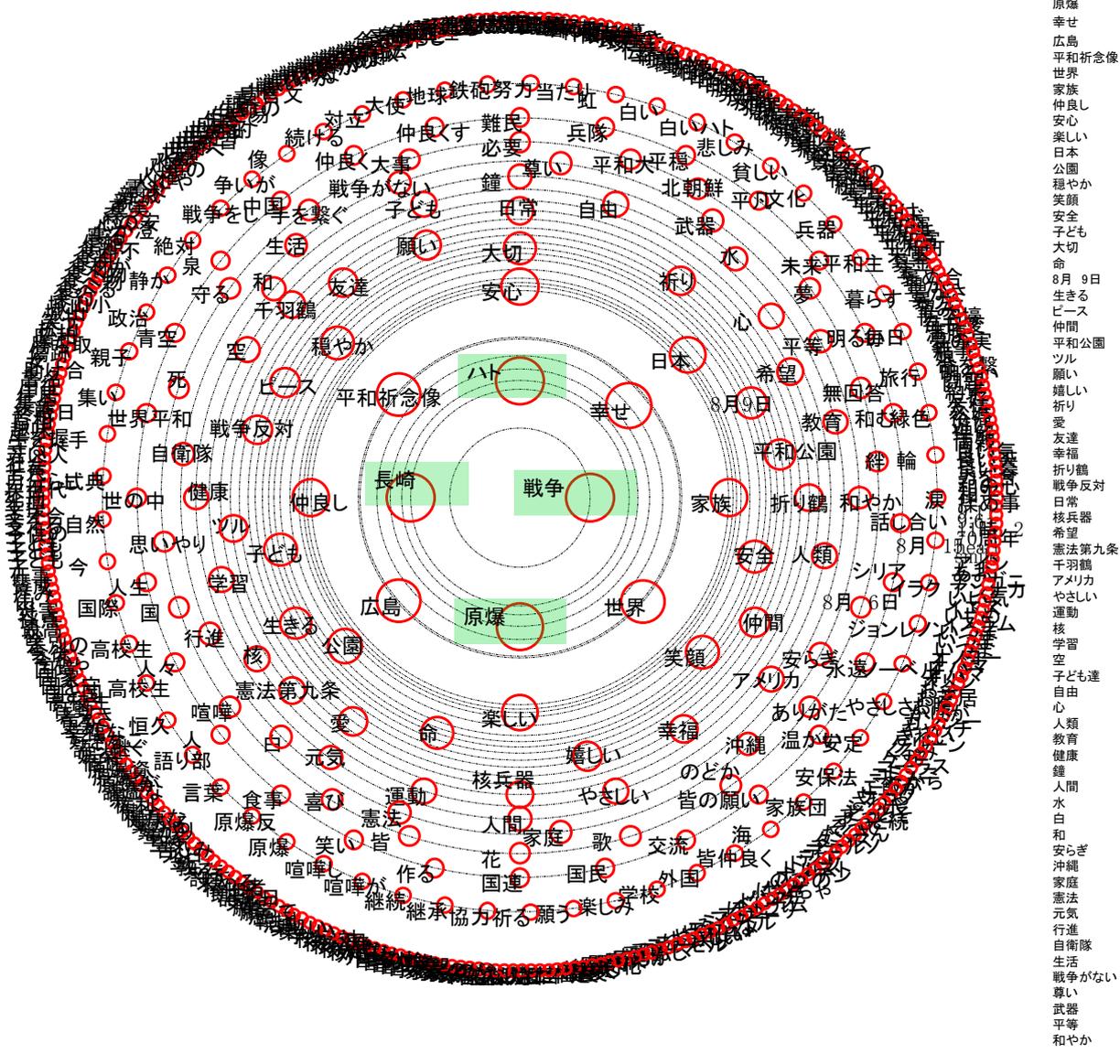


図 1 〈平和〉に関する映画を見る前の意識

の 44.0%が想起している。映画の前、「戦争」は平和からすぐ思いつく言葉であった。それは平和が絶えず戦争のない状態として語られる、いわば思いつきやすい反対語だからであろう。他には、「長崎」(27.8%)、「ハト」(25.2%)、「原爆」(21.8%)が回答者の20%を超えて想起されている。原爆被害の地長崎であるゆえんである。またハトが平和のシンボルとして意識にのぼっている。シンボルを通して平和が意識されていることを示している。10%を超える回答語を見ると、「幸せ」(18.8%)、同じく原爆被害を受けた「広島」(15.4%)、「平和祈念像」(15.4%)、「世界」(15.0%)が並ぶ。すなわち、反対語と言え戦争のほかは、平和のシンボルであるハトや平和祈念像が頭をよぎり、原爆被害の地である長崎、広島が想起され、現状の幸せから世界平和へと飛躍する意識の構図が読み取れる。加害は一切意識

されていない。長崎の兵器生産、魚雷や艦船などは意識の外に追いやられている⁴。

この平和意識が、「はなちゃんのみそ汁」によって、家族の日常を中心にした平和へ、個人として生きることへと動いた。表2は映画の後に増加した回答語(表2右)、減少した回答語(表2左)を示している。増加した言葉をつなぐ意味として、家族とともに健康に生きる日常が平和だとの思いを読み取れる。減少しているのは「戦争」「原爆」「長崎」「ハト」といった長崎における一般的な平和意識である(表2左)。

映画「はなちゃんのみそ汁」は、人々の平和意識を、日常の暮らしの食べることへと傾けた。この傾向は、他どの連想においても現れる意識の方向であり、「はなちゃんのみそ汁」が人々に生じさせた意味の方向である。

表2 (平和)に関する映画を見る前と後の回答語の変化

映画の前2016年4月「は					映画の後2016年4月「				
Cue Word:	増加	減少			Cue Word:	増加	減少		
	消失	新出	回答差	回答差		消失	新出	回答差	回答差
Response Word	total	属性	実人数	人数%	Response Word	total	属性	実人数	人数%
戦争	117	減少	-61	-22.9	家族	65	増加	42	16.1
原爆	58	減少	-50	-18.8	生きる	38	増加	25	9.6
長崎	74	減少	-47	-17.7	健康	26	増加	20	7.7
ハト	67	減少	-38	-14.3	日常	26	増加	17	6.5
平和祈念像	41	減少	-36	-13.5	思いやり	17	増加	13	5.0
広島	41	減少	-32	-12.0	食べる	13	増加	12	4.6
公園	18	減少	-12	-4.5	普通	12	新出	12	4.6
8月9日	13	減少	-12	-4.5	愛	19	増加	9	3.4
平和公園	12	減少	-11	-4.1	やさしさ	11	増加	9	3.4
世界	40	減少	-9	-3.4	大切	22	増加	8	3.1
戦争反対	9	消失	-9	-3.4	心	15	増加	8	3.1
ピース	12	減少	-8	-3.0	毎日	10	増加	8	3.1
ツル	11	減少	-8	-3.0	笑う	9	増加	8	3.1
折り鶴	9	減少	-8	-3.0	笑顔	23	増加	7	2.7
仲良し	23	減少	-7	-2.6	命	21	増加	7	2.7
楽しい	21	減少	-7	-2.6	歌う	7	新出	7	2.7
願い	11	減少	-6	-2.3	感謝	7	新出	7	2.7
核兵器	8	減少	-6	-2.3	暮らし	7	新出	7	2.7
千羽鶴	8	減少	-6	-2.3	守る	10	増加	6	2.3
アメリカ	7	減少	-6	-2.3	当たり前	8	増加	6	2.3
運動	7	減少	-6	-2.3	普通の生活	7	増加	6	2.3
学習	7	減少	-6	-2.3	子ども	20	増加	5	1.9
核	7	減少	-5	-1.9	平穏	8	増加	5	1.9
空	7	減少	-5	-1.9	平凡	8	増加	5	1.9
子ども達	7	減少	-5	-1.9	明るい	8	増加	5	1.9
人類	7	減少	-5	-1.9	伝える	6	増加	5	1.9
教育	6	減少	-5	-1.9	繋ぐ	5	新出	5	1.9
人間	6	減少	-5	-1.9	笑い	7	増加	4	1.5
水	6	減少	-5	-1.9	未来	7	増加	4	1.5
					海	6	増加	4	1.5
					生命	4	新出	4	1.5

と説明されている。大学生が作れるか否かはともかくとしても、みそ汁とは何かのコンセンサスははっきりしている。みそ汁文化は健在である。すると、命と食のつながりを具体的に考えるためにみそ汁を取り上げることは有効である。

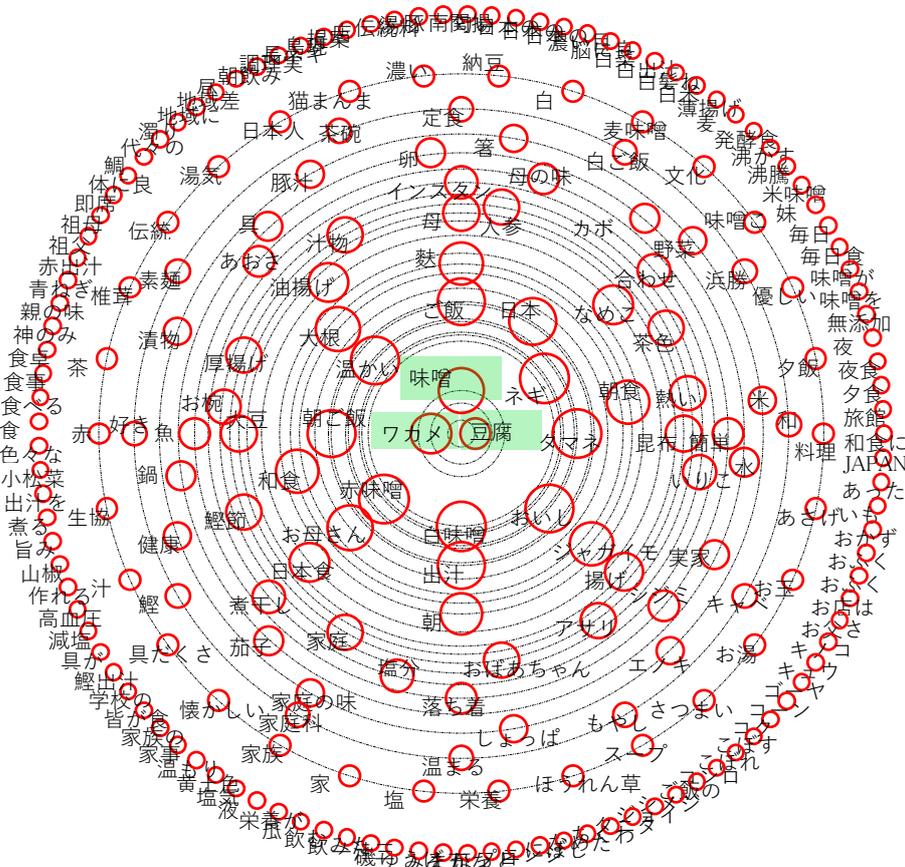
比 56.0%、「ワカメ」と「味噌」がそれぞれ 38.0%で意識の中心にあり、「出汁」（30.5%）、「おいしい」（27.1%）、「ネギ」（26.3%）、「朝食」（18.0%）、「朝」（16.5%）、「温かい」（15.4%）、と並ぶ。作り手として出汁をとる点が大学生より上位にあると言えそうだが、〈みそ汁〉意識の構造は変わらなかった。

連想マップ(Association Map)

Date: 2016年4月
2016年4月長崎大91活水女子大23長崎総合科学大15

Module Version 5.01
Cue Word : みそ汁

回答者数: 129 名, 回答語種数: 215 種類, 回答語総数: 1269 語, エントロピ: 6.24, 連想量総和: 28.96



回答語	語数	回答者数比
豆腐	110	85.3%
ワカメ	91	70.5%
味噌	78	60.5%
白味噌	44	34.1%
ネギ	41	31.8%
赤味噌	40	31.0%
温かい	35	27.1%
おいしい	34	26.4%
タマネギ	34	26.4%
朝ご飯	29	22.5%
ご飯	28	21.7%
出汁	28	21.7%
日本	28	21.7%
お母さん	24	18.6%
大根	20	15.5%
ジャガイモ	18	14.0%
朝食	18	14.0%
和食	18	14.0%
味噌汁	18	14.0%
朝	16	12.4%
なめこ	13	10.1%
日本食	13	10.1%
油揚げ	13	10.1%
揚げ	11	8.5%
昆布	10	7.8%
大豆	10	7.8%
母	10	7.8%
アサリ	9	7.0%
おばあちゃん	9	7.0%
家庭	9	7.0%
味噌汁	9	7.0%
厚揚げ	9	7.0%
汁物	9	7.0%
人参	9	7.0%
茶色	9	7.0%
熱い	9	7.0%
いりこ	8	6.2%
お碗	8	6.2%
インスタント	7	5.4%
塩分	7	5.4%
合わせ味噌	7	5.4%
煮干し	7	5.4%
あおさ	6	4.7%
シジミ	6	4.7%
簡単	6	4.7%
魚	6	4.7%
母の味	6	4.7%
落ち着く	6	4.7%
カボチャ	5	3.9%
茄子	5	3.9%
具	5	3.9%
実家	5	3.9%
水	5	3.9%
鍋	5	3.9%
卵	5	3.9%

図 3 長崎の大学生の〈みそ汁〉意識

試写会の観客にとって、映画の前、みそ汁の意識は、大学生とほとんど変わらなかった。「豆腐」が回答者数

4.2 映画の観客の〈みそ汁〉意識の変化

映画を見た後、観客の〈みそ汁〉の回答語は表 3 のように変化した。

表 3 提示語〈みそ汁〉によって映画を見る前後で変化した回答語

Response Word	total	属性	回答差 実人数	回答差 人数%	Response Word	total	属性	回答差 実人数	回答差 人数%
豆腐	149	減少	-89	-33.5	はなちゃん	34	増加	27	10.3
ワカメ	102	減少	-55	-20.7	健康	33	増加	19	7.3
味噌	101	減少	-46	-17.3	命	22	増加	19	7.3
ねぎ	70	減少	-45	-16.9	生きる	22	増加	17	6.5
朝	44	減少	-27	-10.2	元気	18	増加	15	5.7
大根	36	減少	-22	-8.3	愛情	17	増加	13	5.0
出汁	81	減少	-20	-7.5	大切	14	増加	12	4.6
具だくさん	35	減少	-19	-7.2	家族	32	増加	10	3.8
じゃがいも	26	減少	-19	-7.2	食べる	18	増加	10	3.8
朝食	48	減少	-18	-6.8	作る	15	増加	9	3.4
玉ねぎ	21	減少	-18	-6.8	愛	8	新出	8	3.1
白味噌	19	減少	-17	-6.4	栄養	23	増加	7	2.7
薄揚げ	20	減少	-15	-5.6	幸せ	14	増加	7	2.7
母	33	減少	-12	-4.5	伝える	7	新出	7	2.7
具	27	減少	-12	-4.5	スープ	7	増加	6	2.3
煮干し	19	減少	-12	-4.5	基本	6	新出	6	2.3
卵	15	減少	-12	-4.5	玄米	6	新出	6	2.3
朝ご飯	19	減少	-11	-4.1	大事	6	新出	6	2.3
大好き	18	減少	-11	-4.1	料理	6	新出	6	2.3
昆布	22	減少	-10	-3.8	手作り	14	増加	5	1.9
麩	11	減少	-10	-3.8	生活	6	増加	5	1.9
ご飯	29	減少	-9	-3.4	食べたい	5	新出	5	1.9
赤味噌	13	減少	-9	-3.4	絆	5	新出	5	1.9
豚汁	12	減少	-9	-3.4	毎日	30	増加	4	1.5
美味しい	73	減少	-8	-3.0	発酵食品	9	増加	4	1.5
いりこ	17	減少	-8	-3.0	心	8	増加	4	1.5
油揚げ	15	減少	-8	-3.0	米	6	増加	4	1.5
インスタント	9	減少	-8	-3.0	伝統	5	増加	4	1.5
野菜	27	減少	-7	-2.6	お椀	11	増加	3	1.1
キャベツ	10	減少	-7	-2.6	毎日食べる	9	増加	3	1.1
厚揚げ	9	減少	-7	-2.6	団らん	8	増加	3	1.1
白菜	9	減少	-7	-2.6	水	6	増加	3	1.1
塩分	13	減少	-6	-2.3	元気の素	5	増加	3	1.1
揚げ	11	減少	-6	-2.3	命の源	5	増加	3	1.1
好き	8	減少	-6	-2.3	楽しい	4	増加	3	1.1
味噌こし	6	消失	-6	-2.3	生命	4	増加	3	1.1
温かい	41	減少	-5	-1.9	受け継ぐ	3	新出	3	1.1
ほっとする	12	減少	-5	-1.9	出汁を取る	3	新出	3	1.1
食卓	9	減少	-5	-1.9	出来る	3	新出	3	1.1
茄子	7	減少	-5	-1.9	丁寧	3	新出	3	1.1
あさり	5	消失	-5	-1.9	豆	3	新出	3	1.1
おふくろ	5	消失	-5	-1.9	美味しく	3	新出	3	1.1
しじみ	5	消失	-5	-1.9	命の素	3	新出	3	1.1
ほうれん草	5	消失	-5	-1.9	命の糧	3	新出	3	1.1
					野菜たっぷり	3	新出	3	1.1

表 3 を見ると、豆腐、ワカメなど食材に向けた意識が減少し、映画のタイトルからして当然とはいえ〈みそ汁〉と「はなちゃん」（回答者数比 10.3%増加）が意識のなかで結びつき、「健康」（7.3%増、回答者の 12.6%が解答）だけでなく、「命」（7.3%増、回答者の 8.4%）や「生きる」（6.5%増、回答者の 8.4%）ことや「元気」（5.7%増、回答者の 6.9%）と結びついている。みそ汁はさらに「愛情」（5.0%増、回答者の 6.5%）であり、「愛」（3.1%新出）と結びつき、「大切」（4.6%増、回答者の 5.4%、「大事」を合わせると 7.7%）な食べ物として「家族」（3.8%増、回答者の 12.3%）に結びつけて意識されている。

提示語〈みそ汁〉は回答語の質において以上の変化を見せるが、連想諸量の動きも通常とは異なる様相を呈している。映画の後の連想調査に際して会場にいるとわかる雰囲気として、感動の後であり、言葉は少ない、という現象が起きているのではないか。

映画を見た後の連想は通常、2 回目であり馴れによって増加する傾向がある。馴れがあり、連想調査の間に起きた事柄に刺激されるから、思いを表す言葉が増える。しかしこの映画の〈みそ汁〉において、回答語種数と連想エントロピ、すなわち言葉の散らばり具合、は増加しているにもかかわらず、1人あたりの回答語数は減少している。映画の前の1人あたり回答語種数は 1.67 種類で、映画の後には1人あたり 1.98 種類に増加、すなわち多様な言葉を映画の後に思いつくようになり、連想の散らばり具合を示すエントロピも 7.14 から 7.71 に増加しているが、しかし回答語数は1人あたり 8.17 語から 6.93 語に減少している。

映画によって思いは膨らんだが、書く手は直後には止まり気味だったと解釈できる。感動の直後に連想テストをされても、意識は映画の余韻に浸ったままで、言い添えると涙を引きずっておいそれと言葉が出ないと理解されると同時に、みそ汁の素材である豆腐やワカメは心理上の負担なしに知識として情報処理して書けるが、「健康」「命」「生きる」こと、「元気」の源、「愛情」といった回答語は自分をふり返った思いの深さなしには想起されず、心の中から思い起こして書くことになる、それだけ時間を要する連想だからだろう。映画を見ての感

動が、連想諸量の動きとして現れていると解釈できる。

5 「はなちゃんのみそ汁」は〈自分〉意識を揺り動かした

映画の深さは、観客の自分についての意識を変えたかどうかによって、見ることができる。楽しめても浅ければ、自分意識を変えるほどの印象にならない。自分の生き方、あり方に迫る素材であったかを、提示語〈自分〉の分析によって見たい。

結論から言うと、映画「はなちゃんのみそ汁」は、〈みそ汁〉だけでなく、観客の〈自分〉意識を揺り動かす深さがあった。すなわちこの映画は観客の自分意識を変えた。

自分〉に関する連想マップでは、回答語を質によって、《属性》、《肯定》、《否定》、《その他》、《体》のカテゴリに分けた。

提示語〈自分〉による映画の前のカテゴリ連想マップ図4を見ると、カテゴリ《その他》「家族」（回答者の 15.4%）、「母」（11.7%、自分が母なのか、自分の母のことか不明でカテゴリ《その他》に繰り込んだ）が想起され、自己肯定のカテゴリ《肯定》に「健康」（9.8%）、「明るい」（8.7%）、「元気」（7.9%）、「幸せ」（6.8%）、カテゴリ《属性》に「女」（9.0%）が想起されている。回答語として、屈折の少ない意識状況がならば、カテゴリ別の量としては自分の《属性》に関する回答語が、回答語総数の 37.0%を占めて最多である（図 4 右上）。

映画を見た結果、表 4 に見るように、自分を肯定する回答語が 523 語から 560 語に統計上有意に増加し (p.<.01)、自己否定の言葉が有意に減少している (p.<.01)。すなわち「はなちゃんのみそ汁」が観客の自己肯定感を有意に育てている。別言すれば、「はなちゃんのみそ汁」は観客の意識を前向きにした。

比べるとカテゴリ《肯定》が最多の回答語数になり、右上に位置して連想マップの様相が変わっている。カテゴリ《否定》は減少していることが見てとれる。回答語別に見ると、図 5 で「家族」(回答者の 21.1%) が連想マップの中心方向にすなわち観客の意識の中心に近づき、「生きる」(13.0%)、「健康」(12.2%)、「幸せ」(10.0%) が、回答者の 10% を越える回答語として並ぶ。映画は死を描いたが、生きている自分の思いは、この回

図 5 が映画後の〈自分〉の連想マップである。図 4 と

連想マップ(Association | Date: 2016.5.9 | Module Version 5.01

2016年4月「はなちゃんのみそ汁」統合 映画の 後 Cue Word: 自分

回答者数: 261 名, 回答語種数: 657 種類, 回答語総数: 1400 語, エントロピー: 8.49, 連想量総和: 32.54

カテゴリ名	回答語数	語数比%	回答者数比%
肯定	560	40.0	214.6
属性	493	35.2	188.9
その他	274	19.6	105.0
否定	57	4.1	21.8
体	16	1.1	6.1

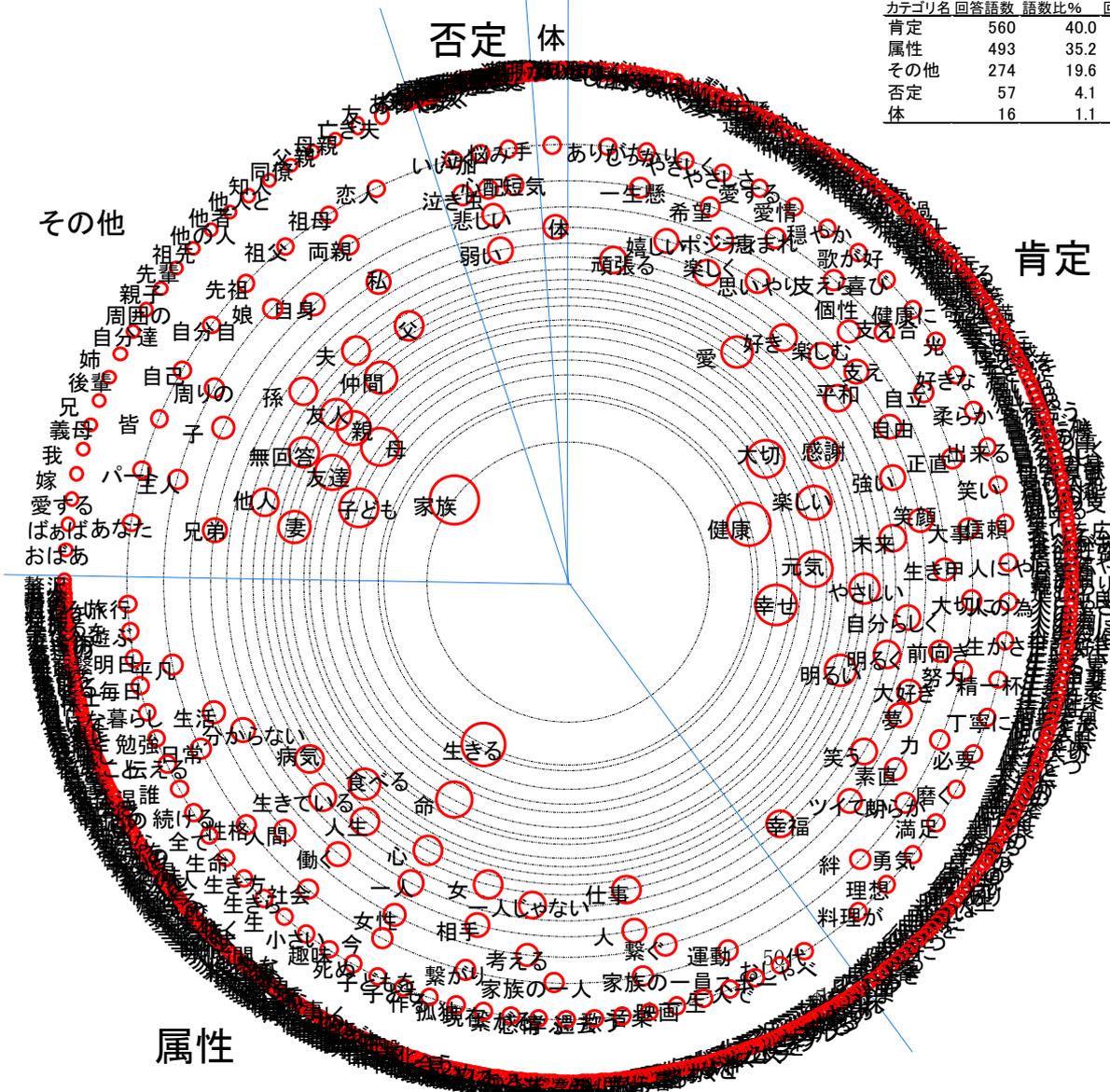


図 5 〈自分〉についての映画の後の意識

答語の並びに読めるように、家族と健康に生きる幸せのためにみそ汁があると、観客は映画のメッセージを受けとった、と読みとれる。

図5の《肯定》を構成する上位の回答語は「健康」（回答者の12.3%）、「幸せ」（10.0%）、「大切」（7.7%）、「元気」（6.5%）、「楽しい」（5.7%）であり、これらが60歳から79歳の女性を中心とした意識によって結果した「健康」と言える意識である。《属性》も「生きる」が最多になり、《その他》で「家族」の意識が強くなった点を見ると、観客は「はなちゃんのみそ

汁」によって健康的な自己肯定感へと至った。

回答語の質の変化をもう少し、前後比較によって追う。表5が〈自分〉の回答語の変化を示すが、最も増えたのは「生きる」（回答者数の6.5%増）であり、「家族」（5.4%）が増加し、「愛」（4.2%）が新しく出現している。増加した言葉には、家族や周りに支えられている幸せ、幸福が並び、「ツイている」「繋ぐ」は映画の台詞に共感し自分の言葉として想起したのだろう。

〈自分〉の連想諸量の動きを見ると、映画の後、回答語

表5 提示語〈自分〉による映面前後の回答語の変化

映画の前2016年4月「はなちゃんのみそ汁」					映画の後2016年4月「はなちゃんのみそ汁」				
Cue Word:	増加	減少			Cue Word:	増加	減少		
	消失	新出	回答差	回答差		消失	新出	回答差	回答差
Response Word	total	属性	実人数	人数%	Response Word	total	属性	実人数	人数%
女	24	減少	-16	-6.0	生きる	34	増加	17	6.5
他人	24	減少	-16	-6.0	家族	55	増加	14	5.4
わがまま	17	減少	-16	-6.0	愛	11	新出	11	4.2
明るい	23	減少	-12	-4.5	幸せ	26	増加	8	3.1
やさしい	17	減少	-8	-3.0	命	17	増加	8	3.1
好き	15	減少	-8	-3.0	感謝	11	増加	8	3.1
私	13	減少	-8	-3.0	一人じゃない	7	新出	7	2.7
真面目	9	減少	-8	-3.0	健康	32	増加	6	2.3
自分らしさ	8	減少	-7	-2.6	明るく	7	増加	6	2.3
嫌い	7	消失	-7	-2.6	楽しく	6	新出	6	2.3
母	26	減少	-6	-2.3	大切	20	増加	5	1.9
一人	12	減少	-6	-2.3	病気	8	増加	5	1.9
妻	17	減少	-5	-1.9	幸福	7	増加	5	1.9
仕事	13	減少	-5	-1.9	ツイている	5	新出	5	1.9
女性	9	減少	-5	-1.9	子ども	21	増加	4	1.5
元気	21	減少	-4	-1.5	友達	15	増加	4	1.5
分からない	9	減少	-4	-1.5	父	9	増加	4	1.5
ボランティア	5	減少	-4	-1.5	夫	8	増加	4	1.5
母親	5	減少	-4	-1.5	思いやり	5	増加	4	1.5
家庭	4	消失	-4	-1.5	支え	5	増加	4	1.5
己	4	消失	-4	-1.5	繋ぐ	4	新出	4	1.5
姉妹	4	消失	-4	-1.5	友人	11	増加	3	1.1
食べる	14	減少	-3	-1.1	無回答	10	増加	3	1.1
自身	7	減少	-3	-1.1	心	9	増加	3	1.1
人間	7	減少	-3	-1.1	未来	7	増加	3	1.1
趣味	5	減少	-3	-1.1	家族の一員	3	新出	3	1.1
おっちょこちょい	4	減少	-3	-1.1	泣き虫	3	新出	3	1.1
何だろう	4	減少	-3	-1.1	支えられている	3	新出	3	1.1
我慢	4	減少	-3	-1.1	支え合い	3	新出	3	1.1
楽しみ	4	減少	-3	-1.1	周りの人	3	新出	3	1.1
見つめる	4	減少	-3	-1.1	正直	3	新出	3	1.1
男	4	減少	-3	-1.1	日常	3	新出	3	1.1
歩く	4	減少	-3	-1.1	平凡	3	新出	3	1.1
怒る	3	消失	-3	-1.1	絆	3	新出	3	1.1
妹	3	消失	-3	-1.1					

種数が 711 語から 657 語、回答語総数が 1502 語から 1400 語、エントロピが 8.62 から 8.49 と、いずれも減少している。観客全体が想起する言葉の散らばり具合が減少したことは、観客の意識が同じ方向に集約されていったことを意味する。すなわち要因として、1. 観客の意識が家族と健康に生きる幸せの方向にコンセンサスとして集約されていったこと、2. 感動の直後で言葉が出にくかったこと、を挙げることができる。

自己肯定感を育てることは、映画の送り手の意図にはなかっただろう。前向きな生へのメッセージを送る意識はあったにせよ、観客が自分を肯定して生きていこうとの思い、自己肯定感育成という今日の教育課題に応える意図はなかったと思える。しかし笑いと共に送ろうとした生きることへの真摯で前向きな思いは、受け手の自己意識を肯定的にする教育効果を生み出している。

6 「はなちゃんのみそ汁」の限界

この映画の後自分に関わって最も増加した回答語「生きる」について見る。生きる、は増えた回答語であっただけでなく、提示語として用意した言葉であった。したがって、提示語〈生きる〉にその内容が現れているはずである。

しかし、提示語〈生きる〉の連想マップに現れる上位の回答語を前後並べてみると、順位の違いはあるものの、表 6 に見るように変わっていない。

表 6 提示語〈生きる〉で多く連想された回答語の前後比較

映画の前〈生きる〉			映画の後〈生きる〉		
回答語	語数	回答者数比	回答語	語数	回答者数比
食べる	124	46.6%	食べる	113	43.3%
家族	54	20.3%	家族	56	21.5%
命	45	16.9%	健康	47	18.0%
健康	44	16.5%	命	44	16.9%
楽しい	35	13.2%	幸せ	34	13.0%
生活	29	10.9%	楽しい	24	9.2%
幸せ	28	10.5%	生活	20	7.7%

この結果は、〈生きる〉内容、つまりどのように生きるかに映画の前後で変化がないことを意味する。すると、

「はなちゃんのみそ汁」は自分の「生きる」ことを自覚させたが、自分の生き方を変えさせるわけではなかったことになる。生きることの自覚は、日常の生活の意識において起こり、生き方の変更を促すものではなかった。言い換えれば、「はなちゃんのみそ汁」は日常の生活の自覚を促すが変更は迫らない、その意味で安心して日常の自分から見ていることのできる映画であった。

提示語〈生きる〉の回答語の前後比較をおこなうと、減少したのは「働く」（回答者の 7.9%減）、「仕事」（5.3%減）など、増加したのは「愛」（4.2%増）、「大切」（3.8%増）、「繋ぐ」（3.8%増）であり、提示語〈平和〉や〈みそ汁〉や〈自分〉に現れたと同様の傾向を示している。

「はなちゃんのみそ汁」は、映画を見た個々人の意識を日常生活の枠のなかで大いに前向きにし、自己肯定感を育んだが、どのように生きるかについて日常の枠を超えて新しい何かを指し示すことはなかった。

この映画のもう一つの壁は、子どもにとっての「はなちゃんのみそ汁」の意味が大人と異なるのではないかという点である。

死を自覚している大人にとって何を次世代に残すか、命の繋がりに自分の思いを懸ける姿は理解できるだろう。しかし、子どもにとっては安心して生きていた保護者が、死ぬのだと眼前に突きつけられるわけで、こんなに悲し

い映画はない。映画鑑賞直後に小学校 6 年生が「こんなに悲しい最後の映画は見たことない」と母親に語っている。「どうしてお葬式の写真は笑顔なの？こんなに悲しいのに」と納得できず、「最後、首の辺りが苦しくてつらかった」と語っている。小学校 5 年生の子どもは、「最後のはなちゃんのお母さんが笑顔で映画が止まったときに、ああ、お母さんが死んじゃったんだと思って悲しかった」と

保護者の死に悲しみの衝撃を受け、「最後は涙が出そうだったよ」と話している。小学校 2 年生は後日みそ汁を作った際に、「〇〇ちゃん（子どもの名前）のみそ汁、

お母さんが死なないバージョン」と言いながら渡したという。子どもにとって、みそ汁を引き継ぐ代償が保護者の他界とは、あまりに大きく、理解を超える。保護者や周りの人が、子どもと死を語るつもりで共に見る覚悟が必要だろう。映画の後、絵本や物語に描かれる死のすがたによって語りの支えを得るなどすれば、親子で死を語る機会になる。

日常のなかの死として描かれるこのドラマは、日常の生活意識に止まる点、ならびに子どもにとっての意味が異なる点で、壁を持っている。この壁は映画の意義をそぐものではないとしても、観客層の広がりや問題提起に限界が見える。

7 おわりに

「いのちと食を語り合う映画会推進委員会」は、映画上映を促す集まりであり、食べる場所から命のあり方、生き方を考えて欲しいと願っている。願いは、日常生活の質の改善だけではなく、自分を肯定できる意識の醸成であり、平和の意識である。そのために映画というメディアによって、人を結び生活を見直していけるのではないか。「はなちゃんのみそ汁」による観客の意識変容分析結果は、推進委員会の意図と映画とが合致したことを示している。

「いつものみそ汁、生きる力」にこの映画の普及メッセージを決めたのは、映画の本質に沿っていた。日常の枠から外れない安心できる基盤の上に展開するドラマは、ある程度の人生を過ごした大人の観客の自己肯定感を有意に高める力があつた。映画は、家族とともに健康に生きる幸せのために、みそ汁という日常の意味が大きいことを示し、生きることへの励ましを送っている。

映画を見た年齢階層への教育として考えた場合、この映画は意味がある。おそらく、どう死ぬかを意識する年齢階層に、感動と自己肯定をもたらすのであろう。しかし、死を前提せず、成長を生き方とする年齢階層には、保護者の代償がみそ汁づくりとは納得しがたいだろう。食を削り込んででも、何かができるようになりたい層には、〈生きる〉新しさがこの映画から出現しなかったように、どう生きるかを提示していない。この映画において、生きていく方が歌手になるための声の出し方の訓

練か、みそ汁作りの訓練か、絵本というフィクションの世界に遊ぶ力か、何ができるようになるべきかは、子どもの選択ではなく、大人の側の選択であった。みそ汁を作れることによって、自分にどのような意味があるか、伸びようとする意識は、自分の選択による自己実現の努力をしたいだろう。それは時として、保護者の選択とは異なる。

そう考えるとき、教室を、子どもの選択の場、子どもの時間にするのが、映画というメディアの提示による感動の後に登場する教員の仕事であろう。優れているとしても素材の提示に終わる映画とは異なり、子どもが協同で選択し、何かができるようになる場を支える任務が教員の役割になろう。

註

- 1 J.オーモン、A.ベンガラ、M.マリー、M.ヴェルネ、武田潔訳（2007）、映画理論講義、勁草書房、p.273
- 2 上菌は、以下の論文によって観客全体の意識の動きの質的量的な分析を行っている：上菌恒太郎（2011）、映画「ブタがいた教室」による観客の意識変容、長崎大学教育学部紀要—教育科学—第75号、pp.1-9
- 3 連想法については以下を参照：上菌恒太郎（2011）、連想法による道徳授業評価 教育臨床の技法、教育出版。なお本論において連想の提示語を〈〉、回答語を「」、回答語を意味内容によって分けた場合のカテゴリを《》で示す。
- 4 長崎の大学生の平和意識の定義について以下を参照：上菌恒太郎、平和の定義 —平和責任：被害、加害責任、そして記憶の文化—、長崎大学教育学部紀要：教育科学、78, pp.19-27; 2014、URL : http://naosite.lb.nagasaki-u.ac.jp/dspace/bitstream/10069/34463/1/kyoikugakaku78_19.pdf。また中華人民共和国の道徳教科書に見る戦争と平和については以下を参照：上菌恒太郎、蒲池文恵、中華人民共和国の道徳教科書に 中華人民共和国の道徳教科書にみる戦争と平和 —教科書を通じた統合一、長崎総合科学大学紀要 第55巻 第2号、2016